

大人の「もの」&「ひと」楽しみマガジン

昭和23年7月1日第3種郵便物認可 通巻2330号 1994年12月28日(水曜日)発行

# AMUSE

12/28

1994 No.14

定価480円

毎月第2・第4水曜日発売

毎日グラフ・アミューズ



# 超宮武外骨 シヨ

【特集】更紗の風合いを楽しむ

TAKARAZUKA SPECIAL

紫苑ゆう

美をつくる 職人世界

張子玩具



# 宮武外骨

# パースペクティブな絵葉書コレクション



哲学上よりいへば本誌は即ち理想主義と称するべく政治上よりいへば進歩主義、経済上よりいへば実利主義、宗教上よりいへば楽天主義、更に進んで編集上よりいへば遊び主義にして、発行上よりいへば金儲け主義なり。  
(明治34年『滑稽新聞』)

【なかよし】

ここに紹介するのは、大正・昭和初期の絵葉書である。この絵葉書、実は、明治時代に活躍した反骨のジャーナリストとして知られる宮武外骨が、昭和に入り、戦時下、東大法学部地下にある「明治新聞雑誌文庫」において、自らアルバムに整理していたものである。彼独自の分類によって、絵葉書はエスプリとユーモアに満ちた光彩を放っている。







宮武外骨(1867~1955)は、四国の現在香川県にあたる讃岐に生まれた。親がつけた名前は亀四郎である。18歳でジャーナリストを志し上京。その後、改名した。19歳には早くも書籍を発行したのを皮きりに、20歳で『頓智協会雑誌』を創刊。同雑誌において23歳のとき、発布されたばかりの『日本帝国憲法』のパロディを掲載して治安妨害を問われ身柄を拘束され、雑誌は廃刊に追い込まれる。

以後、外骨が発刊した雑誌『此花』や、新聞『滑稽新聞』、単行本『賭博史』などなど、その数は200点に及んだ。その権力におもねない、自由な遊びの精神は、体制を刺激することとなり、入獄4回、罰金刑15回、発行停止・発売禁止14回をうけた。

文／金丸弘美  
撮影／古文書複製社 幸田彰  
協力／明治雑誌新聞文庫





# 【おどり】



スコブル多く売りたいとスコブル苦心して居るがそれでスコブル景気がよければスコブル目出度いが若しスコブル不評判であつてスコブル売れなかつた時にはスコブル面目玉を失ふてスコブルしよげるだらう。(大正5年『スコブル』)







都 京 車電花車飾装 月四年五拾和昭



編 興 夜 車電花車飾装



園 飾 車電花車飾装式路都



園 花 (車電花の目景祝系福城御下野文東)



園 飾 車電花車飾装



園 飾 車電花車飾装



園 飾 車電花車飾装



園 飾 車電花車飾装

予は自らつむじ曲がりをもつて  
 じ、そのヒネクレ根性を一代の生  
 命として居る者で、予自らは真の  
 奇人と信じてゐるのである。(大正  
 6年『つむじまがり』)



**【花電車】**



園 飾 車電花車飾装



園 飾 車電花車飾装



園 飾 車電花車飾装



園 飾 車電花車飾装



園 飾 車電花車飾装



園 飾 車電花車飾装



園 飾 車電花車飾装



園 飾 車電花車飾装





(物名田秋)



(物名田秋)



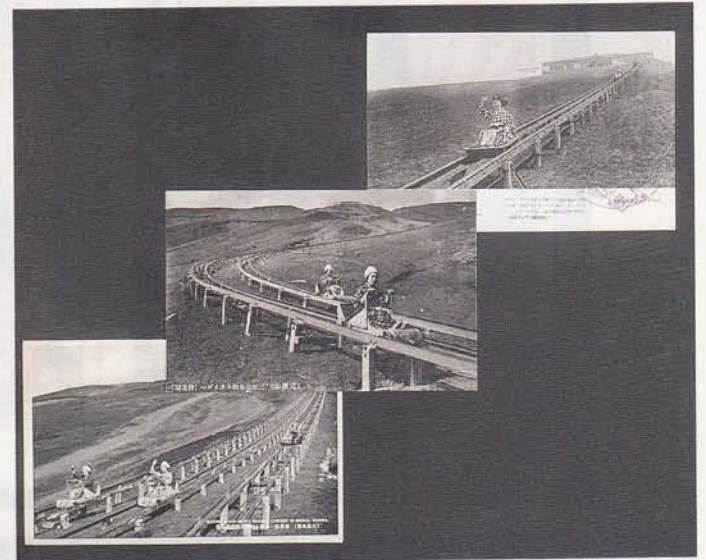
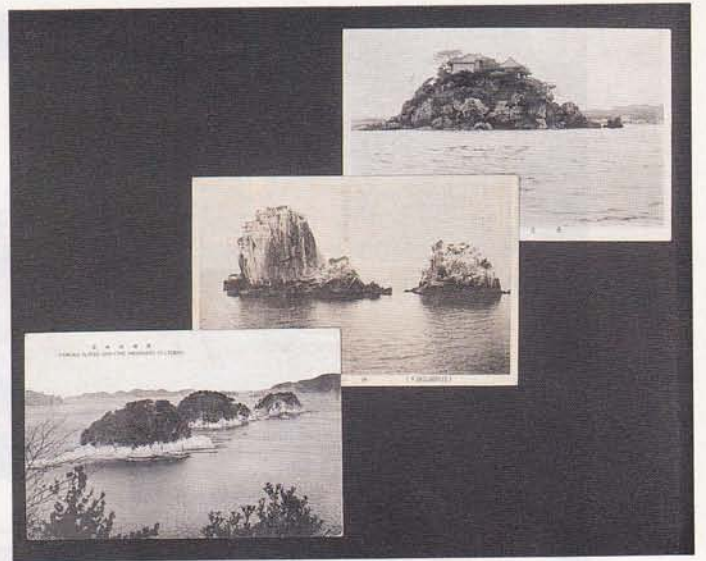
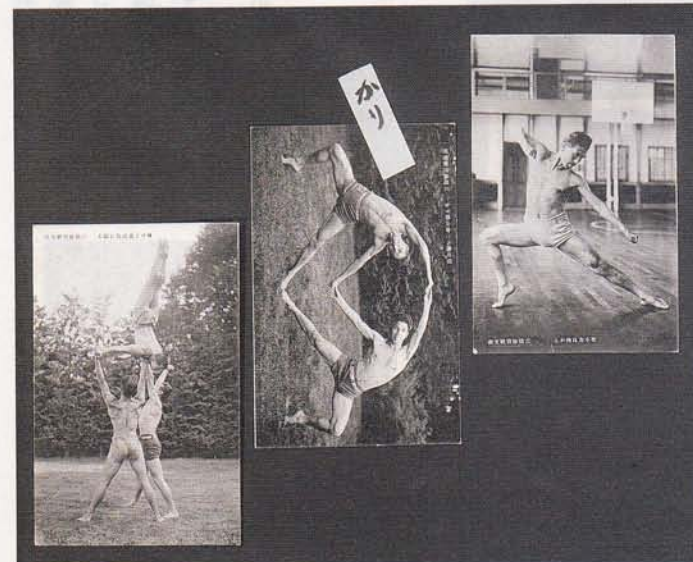
秋田 (物名田秋)



多くの読者は面白半分に知識を得ると云ふ実益半分もあるべし、発行者の文武堂主人は面白半分に金を儲けたいと云ふ欲気半分なり、其各々異なる半分の趣旨に面白半分の価値十分ならずや。(大正6年『面白半分』)

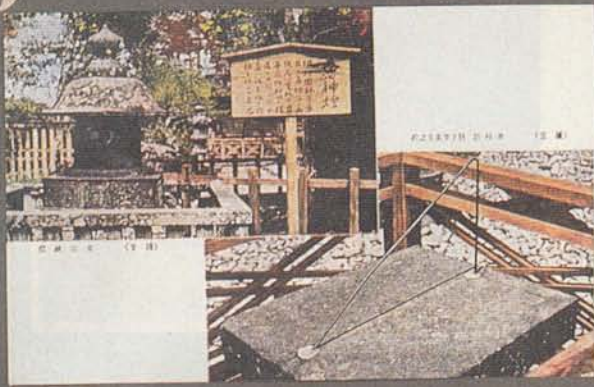








日



手平塚は洞窟、夜見た見りよ昇夜月



月



亀は他の動物と異なつて外骨内肉の動物なりと字彙にあるので、幼名の亀四郎を改めて外骨と名乗るのである、これは事理明白たる当然の改名ではないか、然るに外肉内骨の動物其は、これをヘンテコとして別号と認める。(大正6年「つむじまがり」)





火



岩盤崩落引 樂神 鼓地噴鳴 (武)



心 天 行 雲 天 (新即知地景流)



(原在大澤原) 打夫成奇山形石 (泉風摩原上)



鐘鐘大地山國噴多於以之出分新雲



噴煙山形石 (泉風摩原上)

水



温泉 (大澤原) 大澤原 温泉



温泉 (大澤原) 温泉



温泉 (大澤原) 温泉



温泉 (大澤原) 温泉



温泉 (大澤原) 温泉

【七曜(日月火水木金土)】



木



(ノモリノ宮ノ上ノ千) 樹孫公ハモノノ高照高 浦邊鏡南



松笠園公館菅戸水



The Japanese Garden, Tsuru of Hokkaido 樹孫公ハモノノ高照高



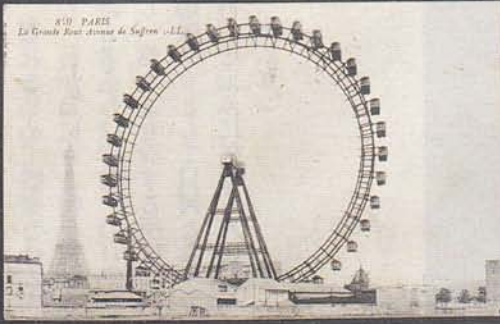
土



金







車

俗語蒐集好きの癖、さては新雑誌  
 発行好きの癖、それを二二号で廃  
 刊しても平気な癖、その他、何好  
 きの癖、何嫌いの癖を、一々列挙  
 したならば、なかなか七癖どころ  
 か、四八癖位はあるかも知れない。  
 (大正10年『二癖随筆』)





九



南



マツチ  
燐寸のレットルを集め、藩札を集め、富札を集めて娯楽とせる人々多し、何が為にさる物を集むるやと詰る者あれば皆夫々の口実あるべし、然れども詮する所は、類聚に興味ありとして只何となくおもしろしと云ふに外ならん。(大正10年『笑ふ女』)

# 【相對語表】



怒



喜



起



坐



## 明治・大正を知る貴重な文庫

東京・本郷にある東京大学法学部の地下に「明治新聞雑誌文庫」がある。この文庫はジャーナリスト宮武外骨が収集した明治・大正期の雑誌、新聞約8000種類が、彼の著作物とともに

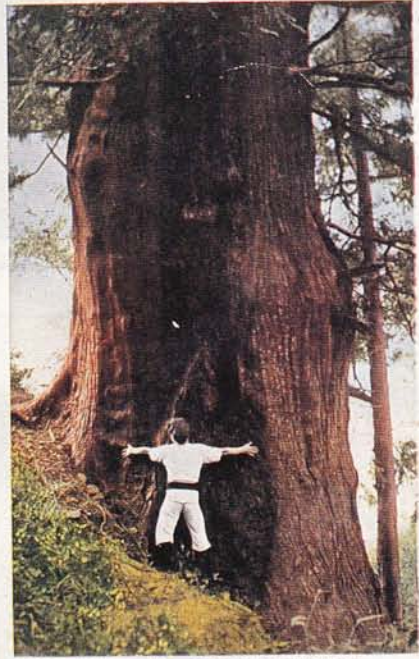




世に猥褻研究を卑陋なりとして擯斥蔑如する者あり、予はこれに対し、弁明的、反抗的、啓蒙的に本書を著して、世人がマジメと認むる諸科学にも猥褻関係の事実多きを示さんとするにあり。  
 (大正13年『猥褻と科学』)



CALIFORNIA REDWOOD TREE "MARIANA" MARIPOSA BIG TREE GROVE CALIFORNIA



(製材今・澤藤) 杉大ノ島湯下近附泉温箱山西州甲



## 【大きな物】

取められている。現在、当時の風俗や情勢などを知る上で欠かせない、重要な文庫として、研究者に利用されている。宮武外骨は、ジャーナリストとして、数々の著作物、雑誌、新聞などを発刊したが、晩年は自分が生きた時代の雑誌・新聞の収集に執着を燃やした。それは、自分たちの生きた記録を残しておきたいという外骨の思いがあったからに他ならない。大地震を経験した外骨は、切実に資料の収集を思った。

外骨の熱い思いは、大正15年、外骨60歳のときに、博報堂の瀬木博尚の協力があつて「明治新聞雑誌文庫」として結実する。

もっとも、最初は、中央図書館に付設するように働きかけもされたが、「新聞、雑誌に文化的な価値はない」として、拒絶された。結局、法学部の知人のおかげで、法学部内に文庫は創設されることになる。

外骨は昭和2年より、明治新聞雑誌文庫事務主任となり、23年間にわたり雑誌・新聞の収集に努めた。雑誌、新聞の収集のために、何度か各地に旅をしている。こうして、明治・大正の貴重な資料が、東大の地下に集まることになった。しかし、雑誌・新聞の収集も昭和に入って、かなり充実してきたとみえて、次第に収集の関心は絵葉書へと移行する。

### 戦時下に編集されたアルバム

絵葉書のコレクションについては、宮武外骨が、晩年出していた『公私月









予は明治二十年の頃より大正の近年に至る迄の間、凡そ四十回ほど文章の罪を犯した者として、司法処分又は行政処分を受けた事があるので、古今唯一のシブトイ筆禍者を以て自認して居る者である。  
 (大正15年『明治演説史』)



## 【女の髪形】

売日に人が殺到することも度々だったらしい。

外骨は、絵葉書ブームの最中、『滑稽新聞』の別冊として『絵葉書世界』なる、絵葉書を1冊の本にして出版するということもやっていた。もつともこの絵葉書、ただ綺麗というばかりではなく、ユーモアもたつぷり、なかには結構色っぽいものもある。『絵葉書世界』の描き手の1人に竹久夢二も参加している。

当時は絵葉書の雑誌が次々に創刊され、また、アルバムも多種多様にあつたところをみれば、絵葉書は、広く愛されていたことがわかる。

明治・大正・昭和にかけて、絵葉書は全国的に広がっていく。その人気の要素はいくつかあげることができよう。まずは、写真や絵としての珍しさである。今日のように、カメラが普及していない時代においては絵葉書は、その絵の美しさとともに、情報伝達という役割も果たしていた。

次に宣伝的な発達である。カメラや写真やテレビ、ラジオの普及していないなかでの、情報メディアとしての絵葉書の役割である。会社の宣伝はもちろんだが、観光地での伝達媒体としての絵葉書の役割は大きかった。

さらに「おみやげ」という形での絵葉書の発展もあった。旅行に行ったさの証になるばかりでなく、かさばらない、また廉価で数もあるために、多くの相手に配ることもできる。そういう意



# 笑ふ女

世間にはスグ潰れる社でも永久無限に継続するらしく法螺を吹く者が多いのに有限社とは揮つているとか、又十二号で廃刊する雑誌でも立派なことを並べるのが常であるに早晩廃刊雑誌とは外骨の面目躍如であるとの評判を受けている。  
 (大正15年『早晩廃刊雑誌』)

# 【笑う女】



味でおみやげとしても非常に適していたし、また、カメラの普及しない当時記念写真的役割も果たしていた。そんなさまざまな要素を満たしていた絵葉書は、多くの収集家を誕生させた。

## 外骨独自の意味を持った絵葉書

絵葉書のコレクションの出版物はこれまでにも何冊か、刊行されている。しかし、どれもが、その絵葉書自体のコレクションの域を越えるものではない。その点、外骨のコレクションは、彼独自の観点から、まったく意味の違ったものに生まれ変わっているのである。そこには長年出版に携わり、自ら発行者、編集者、執筆者として携わってきた独自の物の見方が表れている。

何度もの発禁、罰金をくぐり抜けてきた外骨にとって、コレクションを開始した「新聞雑誌文庫」時代は決していいときではなかった。統制はますます厳しくなっていく、東京は空襲にさらされようとしていた。そんな戦争の最中、外骨は、自分なりのアルバムを編むことによって、かつての遊び気分の頃を大いに楽しんでいかに違くない。

外骨の絵葉書アルバムは、305冊ある。それぞれ、すべてアルバムのデザインが異なるものばかりだ。そこには風俗的な面白さ、デザイナーの面白さ、編集することでもまったく違った意味をつくりあげるモンタージュ的ともいえる面白さと楽しさが、横溢している。

参考文献・宮武外骨『滑稽新聞』(赤瀬川原平・吉野孝雄編 筑摩書房)／宮武外骨著作集(宮武外骨 河出書房新社)／宮武外骨(吉野孝雄 河出書房新社)／外骨という人がいた！(赤瀬川原平 白水社)